様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5 月 23 日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：22520074
研究課題名（和文）近世朝鮮儒者の民族アイデンテティーをめぐる言説―東アジア諸地域との対比から
研究課題名（英文）On the statement of a　pre modern　Korea n　Confucian's race identity- from contrast with East Asia areas
研究代表者
野崎　充彦（NOZAKI　MITSUHIKO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50244629

研究成果の概要（和文）：15 世紀の朝鮮は新たな王朝がはじまり、様々な国家制度が整備された。しかし、そこには様座な試行錯誤が存在したのであり、その「揺らぎ」こそ朝鮮社会の可能性を示すものである。
本研究は、士大夫の随筆集を手がかりに、政治・経済・文学・思想・宗教・風俗に至る近世朝鮮社会の形成過程を考察。それを通じ、新たな政権樹立にともに、民族アイデンテティーが確立していくさまを実証的に追及した

研究成果の概要（英文）：The dynasty with new Korea in the 15th century started, and various national systems were improved. However, various trial and error existed there and the possibility of Korean society is shown just in the fluctuation.
We researched the establishment of the pre modern Korea society which through the collection of essays of the 15th century Korean mandarin in a key at politics, economy, literature, thought, religion, and customs .
We pursued the way of race identity was established with the beginning of new political power　.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1400,000	420,000	1820,000
2011 年度	900,000	270,000	1170,000
2012 年度	900,000	270,000	1170,000
総　計	3,200,000	96,0000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、思想史、東洋・日本思想史
キーワード：朝鮮、士大夫、民族、アイデンテティー

１．研究開始当初の背景

新たな王朝が樹立されれば、新たな国家体制の構築が求められる。そうして確立され、定着していく制度は一つだけであり、確たる存在として君臨する。しかし、そこに至るまでの当代の知識人たちの論理や思考の水路は単純ではなく、いくつもの「揺らぎ」が介在していた。このような現象は朱子学を国学とした朝鮮では特に顕著であった。

なぜなら、そこでは仏教や道教風水やシャーマニズムなどの民間信仰のみならず、国土地理・自然現象に対する博物学的関心や、また文学理論に至るまで諸々の文化的要素が朱子学的価値観へのカウンターカルチャーとして位置づけられ、それに如何なる対応をとるかが、否応なしに問われ続けたからである。

「揺らぎ」とは、この対応に至る試行錯誤、または作業仮説の謂いに他ならない。であればこそ、そこで試みられた多種多様な論理と思考の過程を読み解くことは、近世東アジアに生きた知識人の世界認識の理解に必要不可欠なものといえよう。

それはまた、民族アイデンティティーを探る方法の一つとして重要であり、近代あるいは現代における民族エトスの解明にも役だつものと期待されるのである。

２．研究の目的

朝鮮王朝は朱子学を国是とする儒教国家であり、統治機構や法制度などの国家体制もその目的遂行のために構築され、「国家ｱｲﾃﾞﾝﾃﾃｨｰ」の実現をめざした。しかし、当代に生きた知識人たちの精神世界は必ずしもそれと同調していたわけではない。そこで、近世朝鮮儒者の言説を通じ、国家の統治機構や法秩序とは異なる「可能性としての民族ｱｲﾃﾞﾝﾃﾃｨｰ」考察する。そこには国是とされた朱子学に対するカウンターカルチャーとしての諸宗教（仏教・道教）や民俗信仰（始祖神話・風水・シャーマニズムなど）、また地理学的・博物学的知識、および文学理論に至るまで多様な世界が開陳されよう。

それを通じ、近世朝鮮社会の豊饒なる精神世界を再構築できるとともに、中国や日本など周辺諸国の近世に対する再評価も可能となり、東アジアの共通性と相違をさらに明瞭に理解することを目的とする。

３．研究の方法

三年計画なので、年度別に研究方法の概要を述べる。

・平成２２年度

主に二つの方法で進められる。一つは文献的研究、他の一つは現地調査、および現地研究者との研究交流である。

文献的研究においては朝鮮前期、特に、15世紀に活躍した士大夫の言説を中心に、適宜、徳川時代の日本との比較を導入しつつ、テクストの精読を中心に考察を展開させる。朝鮮士大夫や日本の儒者に対しては、次のような文献渉猟も平行して行また、現地調査については、韓国のソウル大学・高麗大学・延声大学などの研究者と意見交換を重ねる。

本年度は特に次の文献調査を集中して行った。

（朝鮮語・朝鮮関係文献）

朝鮮士大夫の精神世界を知る上で最も捷径となるのが、彼らの随筆類である。その代表的なものは『大東野乗』や『稗林』などに収められれてはいるものの、しばしば完本ではなく、抄録であることが多い。そのため、写本間の比較検討が必要となるが、国内は無論のこと、韓国国立中央図書館やソウル大・高麗大など、主要大学所蔵の資料を現地研究者の協力を得ながら渉猟・収拾する。この作業は韓国でもまだまだ未開拓な分野であり、文献研究としても大きな成果が期待されるが、必要最小限なものについては入手することができた。

（日本語・日本関係文献）

林羅山の『羅山先生文集』は再刊行されたが（ぺりかん社）、古典注釈『徒然草野槌』や『本朝神社考』などは入っていない。そこには朝鮮士大夫の随筆や文集からの引用も見られ、比較研究に不可欠である。大火で消失したとされる羅山の蔵書を念頭に置きながら、その他、関連資料の収集に努めた。

・平成２３年度

前年度と同じく、主に二つの方法で進められる。一つは文献的研究、他の一つは現地調査、および現地研究者との研究交流である。

文献的研究においては『韓国文集叢刊』は必須の資料ではあるが、予算的な限界があるので必要性の高いものを優先的に入手する。また、現地調査については、韓国のソウル大学・高麗大学・延世大学、また中国の諸大学の研究者と意見交換を重ねる。

・平成 24 年度
　文献調査や資料精読は前年度と同じであるが、最終年度である 24 年度は国際的な場における研究発表を通じ、研究成果の達成度を確認する。

４．年度別に列挙する。

（平成 22 年度）
・６月　広島大学で開催された説話文学学会大会で、招待講演者として「朝鮮の説話世界」を発表した。
・朝鮮時代前期に活躍した著名な人物である洪允成に関する逸話の形成過程を、実録・フィクションの両面から考察した論考「朝鮮の説話―人物説話の時代」を刊行した。これは一人の人物に関する諸説話の形成過程を通じ、前期朝鮮社会が如何なる特質を持っていたかを知ることができるところに意義がある。

（平成 23 年度）
・7 月 9 日金子祐樹「『東国三綱行実』における「忠」概念に対する考察」をめぐり、高坂史朗らと研究会を開催し、討議した（大阪市大アジア都市文化学）。これは忠孝観念の朝鮮的な実践のありようをうかがう面で意義深いものである。
・10月26～29日韓国ソウルを訪れ、沈慶昊（高麗大教授）と朝鮮近世儒者の文芸思想に関して討議。また、高麗大学図書館において文献調査・収集を行った。これは、前期朝鮮士大夫の著作収集に役立つものである。
・12月13～18日「東北アジアの歴史地図から見る」と題し、客員研究員として金裕哲（延世大学教授）尹炳男（西江大学教授）を韓国から招聘し、古代から近代に到る東アジアの歴史地図編纂事業に見られるイデオロギーについて討論した。また、岐阜県立図書館において「外邦地図」の収集を行った。
これは朝鮮時代の領土観、および世界観を理解するうえで重要な意味を持つ。
・12月21～27日　中国北京を訪れ、琴知雅（北京大副教授）と前近代韓中関係について討議。また苗千梅（北京外大副教授）と中国における朝鮮時代文学研究の動向について討議。および、研究資料を収集。これは中国から見た朝鮮像を探るうえで成果があった。
・3月26日～30日　韓国ソウルを訪れ、朴熙秉（ソウル大教授）と朝鮮時代漢文学および古典文学史の方法論・華夷思想について討議。また、奎章閣などにおいて資料を収集した。前期朝鮮士大夫の著作収集に役立つものである。

（平成 24 年度）
・5 月　中国南通大学における、アジア文化センター設立記念国際シンポジウムにおいて、ゲストスピーカーとしてアジア文化研究の意義について述べた。
　中国・韓国・ベトナムの朝鮮研究者との意見交換を通じ、アジア文化の相互関係を理解するのに役立った。
・7月、台湾中央研究院において開催された国際シンポジウム「近代東亜城市社会群体與社会網絡」において、「15世紀朝鮮における宗教文化―儒・仏・道・風水の諸相」を発表した。この研究は、朱子学を国是とした朝鮮社会に「宗教の空白」にも似た社会状況が生じ、それが近現代にまで及ぼした影響を論じたものである。近代以前には門前町のような宗教都市が皆無であった朝鮮社会の特異性が浮き彫りになったといえよう。
・11月、韓国全南大学湖南研究所が主催した「白湖林悌国際学術シンポジウム」において、招待講演者として「仲井健治先生の研究活動の再照明―白湖林悌を中心に」を発表した。或る朝鮮文人の生涯を辿り、中央と地方の関係を考察した。

　この他、野崎は研、15世紀の著名な士大夫である成俔の随筆集『慵斎叢話』を中心に、

近世朝鮮士大夫社会の精神世界を描いた著作を準備しており、予定原稿300枚のうち200枚近くまで書き上げ、次年度中には完成の予定である。また、『慵斎叢話』の翻訳にも従事しており、それに施した詳細な訳注にjは本研究で得られた知見が十二分に盛り込まれている。
研究成果

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
（１）野崎充彦　「「仲井健治先生の研究活動の再照明―白湖林悌を中心に」（『白湖林悌の生と文学』14～23 頁　2012 年）
（２）野崎充彦「15世紀朝鮮における宗教文化―儒・仏・道・風水の諸相」（『「近代東亜城市社会群体與社会網絡」国際学術検討会 会議論文集』１～13 頁 台湾中央研究院　2012 年）
（３）野崎充彦「朝鮮のセルフイメージを求めてーリアルはどこにあるか」（『説話文学研究』第 46 号　４～14 頁　説話文学学会　2011 年）
（４）野崎充彦「朝鮮の説話―人物説話の時代」（『漢文文化圏の説話世界―中世文学と説話世界Ⅰ』52～71 頁小峯和明編　竹林社 2010 年）

〔学会発表〕（計４件）
（１）野崎充彦「仲井健治先生の研究活動の再照明―白湖林悌を中心に」（招待講演）白湖林悌国際学術シンポジウム（韓国全南大学 2012 年 11 月）
（２）野崎充彦「15 世紀朝鮮における宗教文化―儒・仏・道・風水の諸相」（台湾中央研究院　2012 年 7 月）
（３）野崎充彦「朝鮮の説話世界」（招待講演）説話文学学会 広島大学 2010 年 6 月）
（４）高坂史朗「東アジアと哲学」（招待講演）（中国・北京外大　2012 年 9 月）

〔図書〕（計２　件）
（１）高坂史朗　『否定と肯定の文脈』（風媒社　2013 年）

（２）野崎充彦『洪吉童伝』（平凡社　東洋文庫　2010 年）

６．研究組織
(1)研究代表者
野崎　充彦（NOZAKI MITSUHIKO）
大阪市立大学/大学院文学研究科・教授
研究者番号：50244629

(2)研究分担者
高坂　史朗（KOSAKA SHIRO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20100178

(3)連携研究者
なし